第３類

# 保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践［Ⅰ］

## ―「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」に関するアンケート調査結果より―

朝野典子

*ASANO Noriko*

本稿は、夙川学院短期大学専攻科（保育専攻）において筆者が担当する保育音楽療育演習の教育実践に関する研究であり、2009年度の履修学生45名に対するアンケート調査の結果に基づく。この科目では、主として音楽療育活動の実践方法を指導し、後期授業においては保育音楽療育実習のための「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を全員が行うことにより、学生が実習経験を共有することをめざした。

アンケートでは、「実習前の自己イメージ」「リハーサルを経験して感じたこと」「他の人の実習報告を聞いて感じたこと」「実習を終えて感じたこと」の４領域（合計20項目）について質問し、回答を得た。

その結果、実習直前にリハーサルを経験したことによる効果と、他者の実習報告を聞くことによる効果が確認された。また、学生の約半数は、「実習をやめたいと思ったことがある」と答えているが、実習後はほぼ全員が「実習を通して自分は成長できた」と肯定し、実習経験に意義を感じていることが明らかになった。

**キーワード**：保育音楽療育、実習、リハーサル、実習報告、共有

### 1. はじめに

保育音楽療育士は、一般財団法人全国大学実務教育協会が認定する資格であり、その教育課程ガイドラインに掲げられた教育目標には、「障害児教育において、発達的な視点を入れながら、保育と音楽療育に関して高度の知識と技能をそなえた障害児の専門職として、さらに生涯学習に関与できる人材の養成を目指す」とある。

この資格は、保育士または幼稚園教諭免許を有することを基礎資格とし、履修が必要な科目は、必修科目と選択科目を合わせて30単位以上になる。

必修科目には実習（3単位）が含まれ、学生は児童から高齢者まで幅広い領域において実習を行う。そこで障害児や高齢者への生活支援を学びながら、学生自身が作成したプランに基づいて音楽を使った療育活動（音楽療育活動）を行う。つまり、実習は学生が習得した専門知識と音楽技能を駆使して対象者と直接ふれあうことによって理解を深め、実際に音楽療育を実践する機会なのである。

筆者は、2008年度より夙川学院短期大学専攻科（保育専攻）において、保育音楽療育士養成課程の必修科目である保育音楽療育演習（通年科目）を担当してきた。

前期授業では、療育としての音楽活動の方法、対象

者に合わせた目標設定と活動プランの立て方等について、実習に向けた下準備を指導する。後期授業では、実習準備と実習のまとめを指導する。

ただし、実習全般を直接指導するのは専任教員であり、筆者は実習の一部分である音楽療育活動について、事前および事後に部分的な指導を行う。学生全員が同時期に実習を行うスタイルではないため、保育音楽療育演習では「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を通して、学生同士が実習経験を共有することをめざした。

実習直前の学生は、実習施設で行う音楽療育活動のリハーサルを行い、教員や他の学生からアドバイスを受ける。学生がリハーサルを通して自分自身の話し方や声の大きさ、歌や演奏の速度、活動の展開等が適切であるか等について考え、改善し、自信をつけて実習に臨めるように、さらに、他の学生の意見を広く取り入れて活動内容の質を高めて実習に臨めるよう期待した。

また、実習を終えた学生は施設や対象者の様子、音楽療育活動の実際について翌週の授業で報告し、各自の課題を見つけて次回の実習に備える。実習を経験していない学生にとっては、報告を聞き、不明な点を質問することにより実習への不安が取り除かれると期待した。

## 2. 方 法

### 2.1 調査対象・期間

調査対象は、保育音楽療育演習を履修する45名である。調査の対象とする期間は、「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を行った2009年10月～2010年1月である。全員の実習が終了した2010年1月末に無記名のアンケート調査を実施した。

### 2.2 手続き

アンケートを集計し、筆者の授業記録を参照しながら結果を分析した。

## 3. 内 容

### 3.1 「実習前のリハーサル」の概要

後期授業開始時に「実習前のリハーサル」の目的と、リハーサルの実施手順を説明した。

＜リハーサルの手順＞

- 実習に行く者は、実習直前の授業で音楽療育活動のリハーサルを行う。
- リハーサルの時間は、実習施設での音楽療育活動の時間と同じとする。
- リハーサルでは、実習で使用する楽器、歌詞幕、道具等を準備して使用する。
- 実習者以外の学生は、対象者役（障害児や高齢者）となって協力し、リハーサル終了後、積極的に質問や助言をする。
- 実習者は、リハーサルで得た経験と、教員や学生からの助言を受けて、音楽療育活動の内容を再検討し、よりよいものにして実習に臨む。

リハーサル終了後、セラピストを演じた学生は実際に演じて気づいたことや反省点などを話し、続いて対象者役の学生が意見や感想を述べ、その後、教員が具体的に助言を行った。

### 3.2 「実習後の報告」の概要

実習を行った学生は、翌週の授業時に数分程度の報告を行った。報告するときに留意すべき点と内容について、次のように学生に伝えた。

<報告の留意点>

- 前に出て、はっきりとした声で話す。
- 話を聞く人に実習の様子がありありと伝わるよう、わかりやすく丁寧に説明する。
- これから実習に行く人が知っておいたほうがいいと思うことを、忘れずに伝える。

＜報告する内容＞

- 実習の概要：施設名、実習時間、1日の流れ
- 音楽療育活動：活動時間帯、クラス・グループ名、対象者の様子（障害の程度や反応）、活動内容、職員の様子
- 感想と課題、反省と改善方法
- 申し送り事項

### 3.3 アンケートの質問内容

【1-1】～【4-3】について、「強くそう思う」「そう思う」「少しはそう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の５段階で回答を求めた。

＜実習前の自己イメージ＞
【1-1 初対面の人と打ち解けやすい】
【1-2 人前で話すことが好きである】
【1-3 人前では緊張するタイプである】
【1-4 人前で楽器を演奏することが好きである】
【1-5 実習をやめたいと思ったことがある】

＜リハーサルを経験して感じたこと＞
【2-1 リハーサルはうまくできた】
【2-2 実習の自信がついた】
【2-3 実習への不安が軽減した】
【2-4 自分の準備不足に気づいた】
【2-5 リハーサルは緊張した】
【2-6 リハーサルはしたくなかった】
【2-7 リハーサルは必要ない】

＜他の人の実習報告を聞いて感じたこと＞
【3-1 自分の実習の参考になった】
【3-2 実習の不安が軽減した】
【3-3 自分の実習が楽しみになった】
【3-4 実習の振り返りに役立った】(自分の実習を終えてから他の人の報告を聞いた場合)
【3-5 報告を聞く必要はなかった】

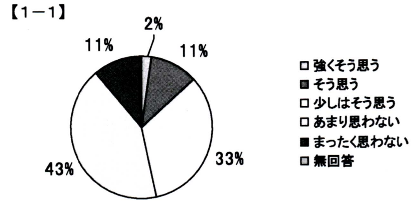
＜実習を終えて感じたこと＞
【4-1 音楽療育活動はうまくいった】
【4-2 リハーサルは実習に役立った】
【4-3 実習を通して自分は成長できた】

## 4. 結 果

### 4.1 実習前の自己イメージ

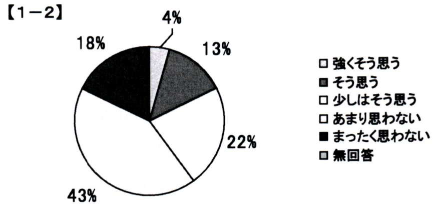
【1-1 初対面の人と打ち解けやすい】では46%が肯定し、54%が否定している。

内訳：「強くそう思う（2%）」「そう思う（11%）」「少しはそう思う（33%）」「あまり思わない（43%）」「まったく思わない（11%）」



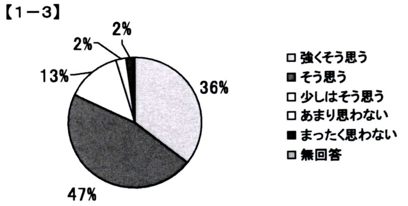

【1-2 人前で話すことが好きである】では39%が肯定し、61%が否定している。

内訳：「強くそう思う（4%）」「そう思う（13%）」「少しはそう思う（22%）」「あまり思わない（43%）」「まったく思わない（18%）」




【1-3 人前では緊張するタイプである】では96%が肯定し、4%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（36%）」「そう思う（47%）」「少しはそう思う（13%）」「あまり思わない（2%）」「まったく思わない（2%）」

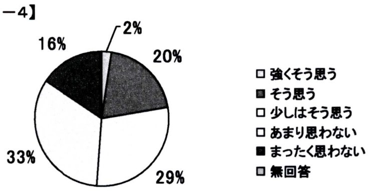



【1-4 人前で楽器を演奏することが好きである】では51%が肯定し、49%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（2%）」「そう思う（20%）」「少しはそう思う（29%）」「あまり思わない（33%）」「ま

ったく思わない（16%）」

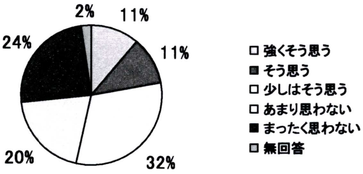
【1−4】




【1-5 実習をやめたいと思ったことがある】では54%が肯定し、44%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（11%）」「そう思う（11%）」「少しはそう思う（32%）」「あまり思わない（20%）」「まったく思わない（24%）」

【1−5】

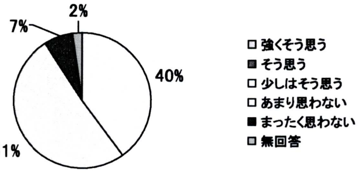



4.2　リハーサルを経験して感じたこと

【2-1 リハーサルはうまくできた】では40%が肯定し、58%が否定している。

内訳：「強くそう思う（0%）」「そう思う（0%）」「少しはそう思う（40%）」「あまり思わない（51%）」「まったく思わない（7%）」

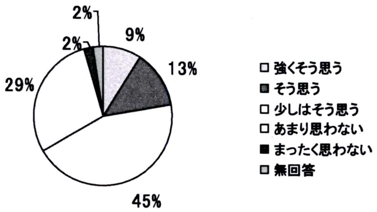
【2−1】




【2-2 リハーサルをして実習の自信がついた】では67%が肯定し、31%が否定している。

内訳：「強くそう思う（9%）」「そう思う（13%）」「少しはそう思う（45%）」「あまり思わない（29%）」「まったく思わない（2%）」

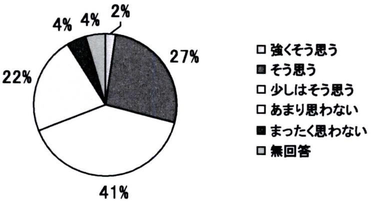
【2−2】




【2-3 実習への不安が軽減した】では70%が肯定し、26%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（2%）」「そう思う（27%）」「少しはそう思う（41%）」「あまり思わない（22%）」「まったく思わない（4%）」

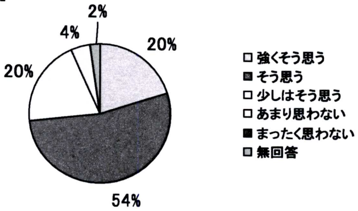
【2−3】




【2-4 自分の準備不足に気づいた】では94%が肯定し、4%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（20%）」「そう思う（54%）」「少しはそう思う（20%）」「あまり思わない（4%）」「まったく思わない（0%）」

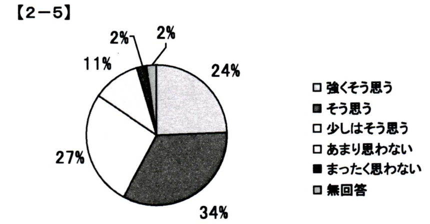
【2−4】




【2-5 リハーサルは緊張した】では85%が肯定し、13%が%否定している。

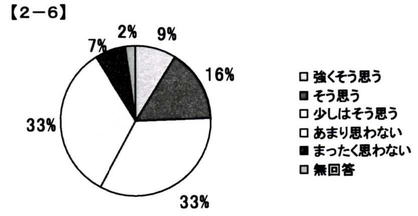
内訳：「強くそう思う（24%）」「そう思う（34%）」「少しはそう思う（27%）」「あまり思わない（11%）」「ま

ったく思わない（2%）」



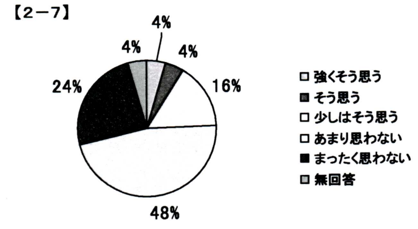

【2-6 リハーサルはしたくなかった】では58%が肯定し、40%が否定している。

内訳：「強くそう思う（9%）」「そう思う（16%）」「少しはそう思う（33%）」「あまり思わない（33%）」「まったく思わない（7%）」




【2-7 リハーサルは必要ない】では24%が肯定し、72%が%否定している。

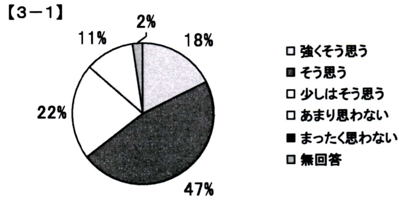
内訳：「強くそう思う（4%）」「そう思う（4%）」「少しはそう思う（16%）」「あまり思わない（48%）」「まったく思わない（24%）」




4.3　他の人の実習報告を聞いて感じたこと

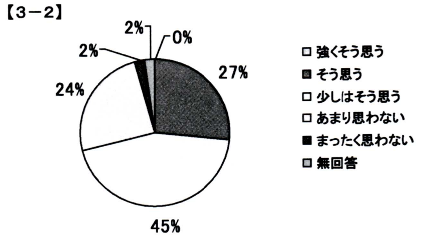
【3-1 自分の実習の参考になった】では87%が肯定し、11%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（18%）」「そう思う（47%）」「少しはそう思う（22%）」「あまり思わない（11%）」「まったく思わない（0%）」



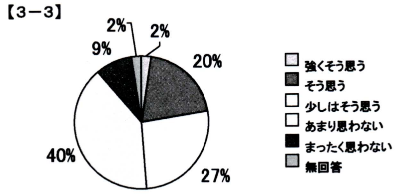

【3-2 実習の不安が軽減した】では72%が肯定し、26%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（0%）」「そう思う（27%）」「少しはそう思う（45%）」「あまり思わない（24%）」「まったく思わない（2%）」




【3-3 自分の実習が楽しみになった】では49%が肯定し、49%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（2%）」「そう思う（20%）」「少しはそう思う（27%）」「あまり思わない（40%）」「まったく思わない（9%）」

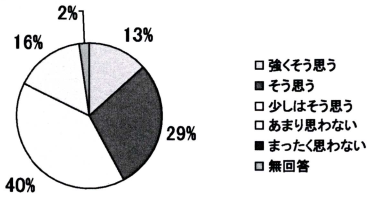



【3-4 実習の振り返りに役立った（自分の実習を終えてから他の人の報告を聞いた場合）】では82%が肯定

し、16%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（13%）」「そう思う（29%）」「少しはそう思う（40%）」「あまり思わない（16%）」「まったく思わない（0%）」

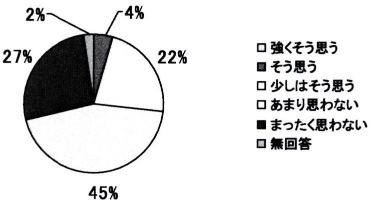
【3−4】




【3-5 報告を聞く必要はなかった】では26%が肯定し、72%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（0%）」「そう思う（4%）」「少しはそう思う（22%）」「あまり思わない（45%）」「まったく思わない（27%）」

【3−5】

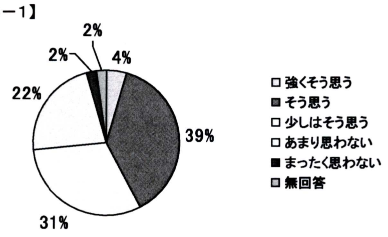



4.4 実習を終えて感じたこと

【4-1 音楽療育活動はうまくいった】では74%が肯定し、24%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（4%）」「そう思う（39%）」「少しはそう思う（31%）」「あまり思わない（22%）」「まったく思わない（2%）」

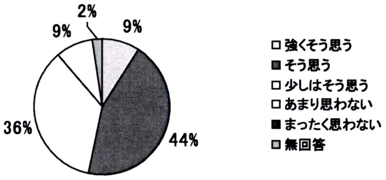
【4−1】




【4-2 リハーサルは実習に役立った】では89%が肯定し、9%が否定している。

内訳：「強くそう思う（9%）」「そう思う（44%）」「少しはそう思う（36%）」「あまり思わない（9%）」「まったく思わない（0%）」

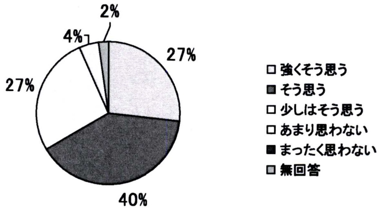
【4−2】




【4-3 実習を通して自分は成長できた】では94%が肯定し、4%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（27%）」「そう思う（40%）」「少しはそう思う（27%）」「あまり思わない（4%）」「まったく思わない（0%）」

【4−3】




## 5. 考 察

### 5.1 実習前の自己イメージ

「実習をやめたいと思ったことがある」と答えた学生は54%を占め、また、学生のほぼ全員にあたる96%は「人前では緊張するタイプである」と答えている。人前に立って音楽療育活動を主導することは、おそらく学生にとって大きな緊張を伴うものであり、それが実習をやめたいという気持ちを起こさせる要因となったこともあると推察される。

また、実習において学生たちが必ず直面する課題が、「初対面の人と打ち解けること」「人前で話すこと」「人前で楽器を演奏すること」である。

これら３項目の中では、「人前で楽器を演奏すること

が好きである」と答えた割合が51%と最も高く、「人前で話すことが好きである（39%）」を12ポイント上回った。人前での演奏を好ましいと感じる学生は、実習において緊張を克服し、演奏を楽しむことができるのではないかと推察する。

5.2　リハーサルを経験して感じたこと

「リハーサルはうまくできた」と答えた学生は40%であったが、その内訳は「強くそう思う（0%）」「そう思う（0%）」「少しはそう思う（40%）」である。つまり、自己評価としては「リハーサルは少しうまくできた部分がある」という程度である。

このように、学生のほとんどがリハーサルの出来ばえを十分評価していないにもかかわらず、「リハーサルをして実習の自信がついた」と67%が肯定した。うまくできたことに由来する自信ではないことは言うまでもない。この自信の背景には、「自分の準備不足に気づいた（肯定94%）」ことや、「実習への不安が軽減した（肯定70%）」ことが要因として考えられる。

「リハーサルは緊張した（肯定85%）」という回答は、自己イメージを問う質問の「人前では緊張するタイプである（肯定96%）」を下回ったものの、実際に人前に立って感じた緊張はほぼ予想通りであったようだ。

「リハーサルはしたくなかった（肯定58%）」、「リハーサルは必要ない（24%）」という結果からは、リハーサルはしたくないが、その必要性は認識しているという学生の心情が察せられる。

5.3　他の人の実習報告を聞いて感じたこと

「自分の実習の参考になった（肯定87%）」「実習の不安が少なくなった（肯定72%）」という結果から、学生の多くにとって他者の実習報告を聞くことが有用であったことが窺える。

一方で、「自分の実習が楽しみになった（肯定49%）」という結果からは、実習報告を聞いて実習への期待をふくらませた学生は半数にとどまったことが読み取れる。

また、実習を終えた立場で他者の報告を聞いた場合、「実習の振り返りに役立った」という回答が82%と高い割合を占め、報告を聞くことは自分の実習が終わった後々まで有用であったことが認められる。

「報告を聞く必要はなかった（肯定26%）」の内訳は、「そう思う（4%）」「少しはそう思う（22%）」であった。この結果は「自分の実習の参考になった（肯定87%）」とは矛盾するように見えるが、報告内容の質によっては「報告を聞く必要がなかった」と学生に感じさせたものと解釈する。

保育音楽療育においては、演奏や歌唱といった音楽表現と同程度に、話すことを中心とするコミュニケーション能力が重視される。「実習後の報告」は自分の経験を客観視し、言語化するトレーニングなったのではないだろうか。また、報告を聞くことは、想像力をふくらませて他者の経験を感じ取るトレーニングとして機能したと考えられる。

5.4　実習を終えて感じたこと

「音楽療育活動はうまくいった（肯定74%）」、「リハーサルは実習に役立った（肯定89%）」という結果から、リハーサルの経験が役立ち、実習に手応えを感じたことが読み取れる。

「実習を通して自分は成長できた」では94%が肯定し、実習を行った学生のほとんどが実習経験に意義を感じていることが認められた。

## 6. まとめ・課題

アンケート結果から、「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」による指導の効果が明らかになり、実習経験の共有をめざす方法としての有効性が認められた。

次の研究課題は、今回のアンケートと同時期に実施した記述式アンケートに基づき、学生が「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」から具体的に学んだ内容について研究を深めることである。

実習における音楽療育活動は、子どもや高齢者の時間を借りて行うものである。その時間を預かる学生が知識と技能を投入して力を発揮できるように、そして、有意義な活動を展開できるように、これからも指導方法を工夫していきたい。

最後に、実習全般を直接指導された倉掛妙子先生から貴重なご助言を頂戴したことに、心からの感謝を申し上げます。

## 7. 参考文献

松井紀和（1991）小集団体験　東京：牧野出版
キャロライン・ケニー（2006）フィールド・オブ・プレイ　音楽療法の「体験の場」で起こっていること　東京：春秋社

メルセデス・パブリチェビク（2006）　みんなで楽しく音楽を　音楽療法士からの提言　東京：音楽之友社

**ピアスーパーバイザーからのコメント**

本報告は、保育音楽療育の外部への実習の実施に関する「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」をとおして、本人の学びや気づきの効果を検証したものである。事前に自己の意識を確認させ、その難点についてリハーサルをとおして克服するよう働きかけることや、学生同士の実習体験の時間差を利用し、他者の報告から事前に問題点を抱かせる点など、その成果がみとめられた。これは他の実習関係の授業に応用できる部分があり、参考になる事例であると思われる。

（担当：家政学科　内田直子）